

# きざりのとと

NO.91 月刊

第九輯 系譜篇 第七号

昭和四十一年一月一日発行 (非売品)  
岡山県瀬野郡吉備町東町二五字坂六呼電四三七番  
吉備観老協会

※84号つぎ

## ○上段家系譜 (板倉氏家臣)

菅原道真菅原相筑紫に左遷の時四人の子被四ヶ所流、即ち(近江國坂田の梅田村、上段村、前田村、柏原村)高視上段村に流さる

高視以後傳系不詳、或は為兵火失之歟

上段八郎兵衛 上段村に住すよつて姓とす

治部大夫 京極家老臣

文龜三年五月廿八日卒

禪正<sup>①</sup> 好道 赤坂氏の家臣 法名 清月院好道日精居士

治部

源内<sup>②</sup> 好周、因幡國鳥取城主宮部善禪坊家臣、不詳正月廿一日卒八十六歳  
法名 梅月淨心居士

助兵衛 好時 安藤右京進老臣知行八百石 天正三年五月廿八日卒法名明光院六三居士  
万兵衛 好則 天正八年庚辰生 田中兵部少輔吉政の家臣、慶長五年庚子九月濃州関ヶ原の合戦に吉政に従ひ、宇喜多軍家の金吾馬印を奪取(ソマ上段家に保管してゐる)田中吉政は関ヶ原の功によつて筑後國柳川城地十一石、後ち其家断絶す。好則筑紫國に赴き主家断絶後、博多城主松平右エ門佐忠之に仕う、柳川に親族ありと云う、福永と云う所を知行す  
寛文六年丙午正月十二日卒八十六歳江戸浅草の祝言寺に葬る、法名等 林半斎居士、室は黒田美作守の家臣如藤左近右エ門の女

参考 鳥取城は天正九年に羽柴秀吉が攻落して吉川経家を追ひ、その翌年に宮部継潤が五万石で封ぜられた(後ち十五万石)偶慶長五年の関ヶ原の役に宮部氏は東軍に抗したので継潤の子の定行は罪せられ陸奥に流され、そのあとへ姫路城主池田輝政の弟、長吉が六万五千石で治封したのである。思うに関ヶ原の合戦當時はすでに定行が家督を継いでいた時代に移つてゐた。上段氏は好周の死没後年号は不明であるがその子好時の時代で関ヶ原の合戦には廿一歳であり宮部家を致仕して徳川家康方にあり田中吉政に仕へて先陣を承り、宇喜多の軍勢を撃破して功名をあげた人である。

助大夫 好直 高崎氏に養子、始め安藤右京進の鬼小姓を勤め後ち禄六百石を領す法名 雄山宗仁居士 元和三年六月八日卒

女子

好起 初名 權大夫、才兵衛、後ち万兵衛と改む寛永二二年某日生、寛文元年辛丑初めて板倉重矩に仕え高石五千人扶持、時に廿七才、重矩の嫡子伯耆守重良の取次役を勤む、同五十二年十二月廿三日高石五十石先手物頭となり下野國烏山城請取役を勤む

(烏山城は堀美作守親昌の年信州伊奈郡飯田城に移るによる)重矩逝去し弟の重道襲封す、同七年本旗奉行となる、元和元年二月重道、武州崎玉郡岩築城六万石城主となり、隨從、天和五年二月十日信州埴科郡坂本に移り更に坂本に住す天和三年閏五月十八日再び重良に仕え信州伊奈郡箕輪城に移る。其後その子重宣の

執事職となる（家老渡辺藤右エ門、戸田又左エ門、名倉八郎右エ門、上段好起なり）  
一勤続六年江戸諸老臣となる、元禄四年老衰のため隠居し重高の時老臣として五人扶持を賜う、号を有無という、正徳四年谷中の重高の下屋敷三崎にて同年五月朔日病北す、九十歳、浅草福言寺へ葬る、法名遠関有無居士  
室は日上武助の女、植村土佐守家智大番組の奥力なり、寛文七丁未年五月七日卒  
法名花顔妙蓮信女、右室関沢大郎左エ門の女、前田右近大夫の家士なり、寛文十年某日卒、右室藤永角右エ門の妹、元禄十六癸未年十月廿七日卒、  
女某 青山因幡守の家臣藤川守郎兵衛の室

好治 維名十馬之助 寛文三癸卯年某月生、延宝四年、十五歳にて板倉石見守重道に仕へ小姓となり、同七年未元服して龜右エ門と改め、父好起に従うて鳥山、岩繁、蓬木（塚本）箕輪に移る、貞享三丙寅年重宣の養子重清の時江戸詣となり、近習となる、元禄四年家をつぎ、食禄百五十石を領す、甚矣衛と改む、同五年取次役となる、同十二年板倉重高庭頼城主二万石に移封、これに扈從す、同十七年先手物頭組足輕二十人を預る、元禄元年正月用人の要職につき、重高に従うて大阪城加番を勤む、後江ノ浦守居番頭同格並取次となつたが、再以重高の子重守に従うて大阪城に赴き、翌年八月病のため江戸詣となり、享保元年十二月九日五十四才で歿した。法名松巖淨塔居士とす。浅草の祝言寺に葬る。室は何某法名貞鏡院梵誓妙耀大姉、享保三戌年正月十九日卒、  
六左衛門 正徳六丙申年六月六日卒、五十余才、法名解脫院劍口利覚信士、室は何某

善之丞 早女ニオ  
母は岡沢氏の女  
法名通了院妙天禪尼、享保十九甲寅年七月七日卒、  
女二人  
其室は助大夫好直の甥養子にして安藤家の老臣

九一郎 元禄八乙亥年正月八日卒、陽清童子  
万五郎 元禄十二巳卯年九月卒、本室良源信士  
喜藏 元禄十六癸未年九月十六日卒、正念院迦誉素授信士  
權之助 宝永六己丑年七月八日、清明院選教和順童子  
起之進 養子杉平伊豆守組興力オ助左エ門の弟、正徳五乙未年八月廿八日十七才の時將と婚す、享保某年卒、法名了境院助誓意居士  
奈典 室は好治の室の姪なり、好教の室となる、享保十七乙子年四月八日卒、法名容善院端誓知足大姉、

將 享保元丙申年六月朔日病北十八歳  
越 宝永二乙酉年生、享保元年閏二月朔日北十二歳  
好教 幼名猿之助、室は藤田在左エ門長時の三男、庄大夫長暉の弟なり、宝永元甲申年正月朔日生る、室母は杉平采女正の家士奥山興兵エの姪なり、享保四乙亥年大阪にて好治の養子とす、忠助と改む、板倉昌信に仕へ、小納戸役を勤む、号を道意、享保十三丙申年病により隠居、寛延元乙亥年八月三日卒、浅草の祝言寺に葬る、法名華岳素拓信士、好教の室母は今治城主杉平采女正の家臣野呂市郎右エ門の姉にレテ、享保十九甲寅年七月七日卒、庭瀬の信成寺に葬る、法名通了院妙蓮大姉、

錫之助 早矢

好真 段之進、後少貢、甚兵工。室は柳原或部大輔の家臣今村氏の二男、校倉勝興に仕へ先手物頭、百石。明和六年二月八日卒。法名 决雲全志。度禪の松林寺に葬る。

(好真の室久今村清左工門の位牌を有す。銘に室曆五十五、亥年九月廿日、北。法名 本堂院隨譽清風如雲居士、江戸四石西涼寺に葬る。)とあり。

秀 好真の室

好且 龜右工門、室は大橋近江守の家臣上段氏の男。校倉勝興に仕へ外圍給人目附。高五十石。明和五年八月廿九日卒。法名 彈論藏六。室は好教の女、初め好真と婚し、好真の死後再婚す。北没年月不詳。

女子 美弥  
女子 銀  
女子 小銀

好政 甚八校倉勝興に仕う文化十登四年三月晦日卒。法名 彈翁了達居士。室は好真の死後再婚す。

(養子と思われしが、実名不詳)

好兼 恭治初の万五助、室は山崎六右工門の男。北没年月不詳。

好奈 貢、室は松山藩士吉田氏の男。校倉武守勝賢に仕う。天保三年十二月廿六日卒。法名 一乘院心源月空居士。室は足守藩士井口九郎の二女。安政二乙卯年七月廿一日卒。法名 正覚院真妙観大姉。

好玄 峯之助、後少万兵衛又は万平、室は足守藩士萩野房之進の二男。校倉撰津守勝全に仕う。外様給人目附。昇進して禄高五十石。先手物頭。

明治六年十二月某日隠居。同廿六年五月十一日卒。法名 本清院忠道日好居士。室は峯岡山藩士那須惣右工門の二女。明治十四年十二月廿日没。法名 本覚院妙清日静大姉。

好生 幼名 亮之助、後少九十九と改む。校倉撰津守勝全側役を勤む。近習中山姓七石二人扶持。明治三十六年癸卯三月九日卒。享年六十有一歳。法名 不退院真道居士。室は備前建部村近藤氏の女。明治十二年庚辰五月二日卒。法名 慈孝院妙貞日祥大姉。右室より平野村(座瀬)より田里次郎の妹。正元年九月三日卒。五十八歳。

好之 明治二十九年八月十三日北没。雲院琢道日玄居士。寺男 御津郡建部村近藤氏(母方)に養子。子孫は平野三四一番地に移住す。鉄治 昭和五年十月二日卒。五十二歳。常真院解脱信士。妻繁 吉備郡平野五反田太田里次郎の長女。明治二十年三月八日生。昭和廿九年九月廿四日北。八十八歳。

精一 一時津山市に在り、後少大段に移る。

万村六 昭和二十九年二月廿六日北。五十二歳。本拜院解脱信士。  
齊一郎 昭和六年十月廿五日中華民国河北省邢台県順德縣北陸軍歩兵上等兵三十四才。清蓮院義覚日舜居士。大塚山に在り。  
鷹志 昭和五年十月廿五日中華民国河北省邢台県順德縣北陸軍歩兵上等兵三十四才。陸軍歩兵隊長二一五才。大塚山に在り。

進 齊治 昭和十八年生 一上段家は禪宗に於て墓地は松林寺内にあつたが、

明治以右日蓮宗不受不施派に改宗し、大塚山に墓地を定められた。好むの娘か収は同藩士町田成美の妻となり大正十年十一月廿一日六十六歳で没した。町田氏の子孫はいま岡山にて医師を勤む。

○ 浦野輝正重勝 (一校名の家臣)

上野國群馬郡三倉邑大戸城主 大永六丙戌年四月廿日卒 全透院に葬る法号青雲院閑翁全透居士

三河守重年 永祿年中甲斐國主武田信玄に仕つ天正三乙亥年十一月十三日長篠の戦いに歿死 清淨院徳誓本心居士

参考

甲斐國主武田信玄と戦後國主上校謙信は信濃國川中島で前後五回戦つてゐるが最も有名なのは永祿四年九月十日(一五六一)の戦である。謙信は軍騎で武田勢の本營をつき、信玄に傷を負せてゐるが勝敗を決しなかつた。信玄が陣頭に用いたといわれた軍旗の「疾如風徐如林侵掠如火不動如山」の詩は池著景教が信玄の氣骨をよく現わしたものである。「はやきこと風の如く、静かなこと林の如く、侵しやすむること火の如く動かさること山の如し」信玄は五十三歳になつた天正元年に三河國に入り、徳川家康と戦ひ二月十一日野田城を陥れたが、海のため甲斐に帰る途中四月十二日籠丸にあたつて最期をとげた。信玄の子勝頼は天正三年五月廿日織田信長、徳川家康の連合軍を迎へて三河國長篠に戦つて敗北した。八年、後の同十年再び軍を起し行動を開始したが利を失ひ、甲斐國天目山の戦に破れ三月十七日ついに一族郎党悉く自刃した。時に勝頼は三十三歳、武田氏二十八代で全く滅んだ。

勝頼の室は北條氏康の娘である。天目山の敗戦の時、勝頼は御里の小田原へ歸るようすすめたが、鏑を殺して自殺した。戦國時代の戦畧結婚で天正五年に勝頼のもとへ嫁いだ。運命を強く生きぬいた女性の心こりである。

若狭守重賢 天正十年三月十七日武田勝頼滅亡後会津百三十万石上校景勝に仕へ慶長

五年庚子七月六日河島中島の戦に討死 高勝院享徽玄利居士 室 恕切院順頼受貞大姉 死不詳

氏部介重隆 上杉中納言景勝に仕へ岩代國伊達郡築川城に居る(上杉景勝は慶長五年

関ヶ原の役に西軍にありて敗北翌年三十万石に削減され羽前國米沢に移る)慶安五年辰年七月八日卒 高台院舞堂淨三居士 室 眞如院清頼妙器大姉 寛文七丁未年七月四日興國寺に葬る

某某

主膳重陳 父と共に築川城に居る。寛文三卯年廢城となり浪人し正徳元年十一月

廿六日築川村に卒 高深院表躰了真居士 興國寺に葬る 室 心空院實到妙如大姉 元祿十一戊寅年七月八日卒

(築川(梁川)城址は岩代(福島県)梁川町鶴ヶ岡にある。いま本丸のあとが梁川小学校となる。文治五年伊達朝宗の創築といわれ、伊達氏の居城であつたが、後長三年以來上杉氏の有となりその臣須田氏が城代となり、寛文三年須田氏が米沢へ移つた後ちが廢城となつた)。

陳之 幼名壽藏 後ち藤大夫、元禄三庚午歳生る。實は奥州仙台藩の家士大久保新太郎の末流にして同國伊達郡大窪村の浪士高橋善右エ門の三男に生れ、瀬野主膳の養子となり、築川に浪居す。この地は尾州藩の底流松平出雲守義方の食封地となる。陳之は由緒ある家筋のため住民は皆帰敬す、故に出雲守義方に召抱らるるに、たに禄を賜わり、築川の館に仕え御代官役を勤む、然るに義方の嫡男式部大輔義真早世して宗家断絶して再び浪人し、陳之は七十歳にて致仕した。幼より儒学を修め、頗る経史に通じ、博識の名あり、又風流を好む、狩野園信を師とし、繪画に長ず、号を橋堤柳という。(当家に達磨大師の肖像の幅を藏す)宝曆十庚辰年六月十四日卒行年七十一歳、築川興國寺に葬る、法名高頭院、画先了、描居士

女子 某 明知ニ乙酉年七月七日卒、法名清操院、一葉妙寂大姉(陳之の室)

女子 奥州伊達郡大窪村住人志村茂兵衛の妻

女子 同國築川村医師佐藤壽慶の妻

陳陸 藤五郎 享保十一丙午年築川に生る浪居し、画を好む、了画と号す、子なきため、家宝日記等を悉く弟の思明に譲り、一生主君を求めず、画道を樂しむ、寛政六甲寅年九月卒、六十九歳、興國寺に葬る、法名巧思院、描玄了、画居士

陳秀 絶助 築川に住す、繪画を好み、号を雪柳、安永四丁巳歲江戸に遊び、九月十三日、帰郷の途次、武州須賀川駅にて病死す、同所の長勝寺に葬る、法名超勝院、哉山了、紹居士、実子なく、養子を迎へて家名を相續し、築川に住す

思明 幼名惣五郎、後ちに称一兵衛、享保十九甲寅年築川に生る、母は主膳の女、十六歳の時父に従ひ出仕し、御代官役所に勤め、江戸其他諸州に轉仕し、後ち元禄となる、四十七歳の安永九庚子歳十月故あつて致仕して、備中に來り、庭瀬藩主板倉勝興に仕へ、累進して、即奉行を奉取し、後ち榎奉行席となり、即代を兼ねた、享和三癸亥歲六月、七十日間の暇を乞うて、(用人森岡五郎右エ門武雅、宮本軍記元知宛の御上書の寫を藏す)暫らく本國に歸り考妣(亡父母)を祭祀す時に七十歳。在官二十六年間、文化ニ乙丑年致仕して、剃髮し如禿と号す、幼より風流を好み、狩野祐信にフゝいて、繪画を修む、知人の需めに應じて、伊豆若銀像救世を描く、号を冬湖斎等學とも云う。文化四丁卯年八月十三日卒行年七十四歳。花尾村大塚山に葬る、法

号は築川興國寺惠照和尚のものしたるもの、賢達院画哲俊描居士、佛画は備中庭瀬松林寺并に奥州築川興國寺に納む。

室 某 備中松山藩主水谷家の浪士、同國笠岡の清水氏の女、享和三癸亥年六月十三日卒、五十四歳、大塚山に葬る、本深院真嶽自性大姉、台室 某 備中笠岡住清水角助の女、文化六乙丑年十月廿三日卒、老譽院明壽大姉。

参考 坪井の山中に稲荷宮の一小祠がある、ここに「寛文十一乙未年、瀬野称一兵衛、衛思明」の銘ある奉納の石灯籠がある(第四輯城址篇坪井城址の項参照)

女子 奥州築川村遠藤称五兵衛の妻 (おわり)この項未完

公認 吉備町庭瀬、國道筋、責任者森安義夫

土地建物賣買 吉備局電一八有線八〇八

吉備不動産相談所

花菱用合名 山陽線庭瀬駅前

堅系会社 吉備整經所

吉備局電一八有線一八〇八